

キウイフルーツかいよう病感染ルート調査チーム調査結果最終報告書

1 現地調査班

- ①発生44園地のうち、発病時期、発病部位、園主からの聞き取り調査等から、一次感染17園地、二次感染26園地と推定。
- ②一次感染17園地は、同じ特定の輸入花粉を使用しており、感染源の可能性が高いと推定。
- ③二次感染26園地については、一次感染園地の病原菌が風雨や作業器材等により伝染したものと推察。特に5月30日以降に確認された軽い症状の園地については、二次感染の疑いが見込まれた。
- ④発生44園地の苗木と穂木は、ほとんどが3年以上前に導入されたものであり、感染源の可能性は低いと推定。
- ⑤全伐採後は隣接園での発生が認められていないことや、二次感染で発病したと思われる園において全伐採後に生育した新梢の先端には発病が見られないことから、全伐採による拡大防止の効果が認められた。

2 流通調査班

- ①花粉については、全量ニュージーランドから輸入されたものを国内の複数業者を通じて購入
- ②苗木については、国内生産されたものを国内の複数業者を通じて購入。
- ③県下JAへ聞き取りを行った結果、4～5割の生産者が輸入花粉の購入を行っており、残りの5～6割の生産者が自家採取。

3 研究・分析班

- ①果樹研究センターにおいて、発生園主から提供を受けた特定の輸入花粉の24年購入1サンプル及び25年購入の1サンプルの2サンプルから高濃度のPsa3型の生きた病原菌を検出
- ②県果樹研究センターにおけるキウイフルーツの切り取った枝に対する室内接種試験の結果、Psa3型病原菌はPsa1型に比べて、ホート16A（ゴールドキウイ）で1.3倍、ヘイワードで1.8倍の強さを確認。
- ③ニュージーランド現地調査により、新たに次の状況を確認
 - ・ニュージーランドでは、初確認後2年で全面積の約4割に拡大し、4年が経過した現在は国内面積の8割が罹病、耐病性品種へ更新し生産を維持。
 - ・病原菌が樹体内に広がるのには、ある程度の期間を要することから、早期発見できれば、発生枝の切除等により病原菌の除去も可能な場合がある。
- ④果樹研究センターの文献調査や現地調査等により、感染後、発病するかどうかは病原菌の濃度や樹勢が強まる春先の気象条件が影響すると見込まれる。
- ⑤(独)果樹研究所の分析では、「園地で採取した菌と園地で使用した花粉から見つかった菌は、Psa3であることは確認されたものの、塩基配列に差異が認められ同一の菌であることと断定はできないが、Psa3ニュージーランド系とSNPプロファイルが一致する」としており、この2つの菌の類似性は限りなく高いことと推定。

※SNPプロファイル：DNAの特徴的な配列を探し出し比較することで近縁かどうか調べた結果